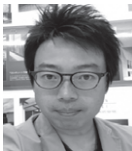


# 吉田五十八の 近代数寄屋住宅

2019年10月25日

出口 基樹 (JIA 三重)

日新設計



去る10月25日、三重大学建築学科の大井隆弘先生を講師にお迎えし、表題のセミナーを行いました。先生が吉田五十八について研究された内容の一部を四章構成でお話いただきました。

まずは前置きとして、東京にある鯉組の紹介がありました。2017年創業の新しい会社ですが、茶室や数寄屋に特化した建築に力を入れており、様々な建築実績を持っています。そのうちのひとつ「嶋津山の茶室」は茶室の複合建築という新しいスタイルで、とても興味深い建築でした。また、吉田五十八を研究対象にした理由、について説明があり、日本の住宅の大変革期の実態を知りうること、戦時統制下の住宅を知りうること、施主も含めた数寄屋・近代和風の流れを知りうること、の三つを大きな理由としてあげられました。それらの一部を今日、垣間みようということで本編に入ります。

## 第一章「現存する住宅作品」

現存する建築を、五十八の設計当時の年齢とともに写真で紹介。同時に会場内では大井先生がまとめられた平面図、立面図などの図集も回覧され、写真と図面を見比べながら進められました。先生の説明どおり、年齢を重ねるとともに、作風がウェットからドライに変化して行く過程が良く分かり、建築家にとって加齢が与える影響が大きいことを改めて認識しました。政治家の自邸もかなり手掛けており、特筆すべきは吉田茂、岸信介の両総理大臣経験者が含まれることです。政界との関係性も深かったことが窺われ、それが第二章に繋がっていきます。

## 第二章「吉田五十八」

この章では、五十八の経歴が紹介されました。薬屋(あの太田胃散です)の息子として生まれた五十八は、親戚筋の吉田家の跡継ぎとして養子に出されますが、名前だけの養子縁組で、そのまま太田家で成長します。建築と酒と長唄が好きなのは、長唄界のパトロンとなっていき、歌舞伎など日本文化との関係も大変深いものがあつたようです。そのあたりから、政界とのつながりが出来たのではないかと推測されます。家が裕福であつたこともあり、東京美術学校に10年も在籍した五十八は、建築のみならず、美術界の人々とも仲良くなり、交友関係を拡げていきます。その人脈の広さもあり、学校在籍中から設計活動を行っていた五十八でしたが、そんな時に発生したのが関東大震災でした。その混乱と困惑から暗中模索し、欧州と米国に留学することを決意した五十八は、かの地の先進建築(新建築)を学びため日本を出国します。しかし予想に反し、留学先で見た新建築に、落胆を感じた五十八は、むしろ伝統的な様式建築に感銘を受け帰国します。そこから日本の伝統を取り入れた建築に情熱を傾けるようになった、ということで第三章へと進みます。

## 第三章「住宅作品とその概要」

五十八の住宅作品の概要と傾向について、研究者の視点で紹介がありました。まず各住宅の建蔽率の分布から、10～40%に集中していること、年齢と反比例して建蔽率が小さくなっていくことが分かりました。また、1階に対する2階の面積も、どんどん小さくなっていきます。五十八は常々「数寄屋は平屋建てが最も美しい」と言っていたそうですが、その言葉どおり、二階建てから平屋建てに変遷していきます。もちろん、有名になり裕福な施主が増えた側面もあると思います。広い敷地に設計できるようになり、アプローチに強いこだわりを持ち、塀に沿って長い距離を歩かせる計画が多く見受けられるようになります。また、廊下がきちんとあるプランも多く、このあたりに先述の伝統建築の強い影響を感じます。特に初期の作品は、伝統的な「良い和建築」を多く設計していますが、先生曰く1935年を分水嶺に、「モダンな和建築」にデザインがシ

フトしていきます。その変遷を五十八の周辺環境に照らし合わせると、事務所の移転・所員の入れ替わり・施工者の変更、などが影響しているのではないかと、興味深い説が論じられました。

## 第四章「吉田五十八の作風」

最後に五十八の作風について、具体的なディテールの事例を挙げて説明がありました。特に大壁に執着したくだりが印象的で、現代では一般に広く用いられる大壁ですが、その当時は真壁が当たり前なので、相当苦労したようで、そこにいたるまで作品毎に段階を踏んでいきます。まずは吊束を無くし、次に欄間を吹き抜けにし、最後に長押を無くし大壁で構成された空間ができあがって行く様は、大変興味深いものでした。現代住宅には普通に存在する幾つかのディテールも五十八が開発したと云われており、雪見障子・横棧の障子・押込戸・レベル差のある部屋などがあげられます。先述の分水嶺といわれる1935年には、新建築誌上に「近代数寄屋住宅と明朗性」という論文を発表します。これは五十八のマニフェストともいえる論文で、それ以降の作品では、建築の線の数を減らして行くことを実践し、モダンな空間をつくり続けていきます。1940年代には、ミースに似ているといわれるまでに作風が変化して行く様がディテールから読み取れ、とてもおもしろい内容でした。

今回の大井先生のセミナーを受けて、時代と年齢の変化・周辺環境の変化が建築家の思想や作風に与える影響の強さを改めて感じました。我々が活動する現代も、IT技術やAIの進化など、ある意味大変革の時代といえます。後に振り返った時に気付くのかも知れませんが、我々の思想・作風もその影響を受け、きっと変化しているでしょうし、そうあるべきなのかもしれません。

